# 死神の尋問

マッカーサ軍曹∠(?^?)

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

響達はシェム・ハを打倒して響達に日常が帰ってきた。そしてしばらくしてある男が錬金術師に依頼されその男は情報収集をしていると暁切歌を見つけて誘拐する……男と装者達によるハチャメチャな物語が始まる……。

追記：拷問を尋問にしました。なんかおかしいと思ったからね!!

# 目　次


1　情報収集 ―― 1
2　バタートースト ―― 4
3　チャーハン ―― 7
4　兎とみたらし団子 ―― 9
5　ギョーザ ―― 13
6　ハンバーグ ―― 17
7　へいき、へっちゃらｉｎご飯メドレー ―― 20
8　お好み焼き ―― 24
9　嫁と死神とおにぎり ―― 27
10　シチュー ―― 30
11　赤いシャツ ―― 33
12　カツ丼 ―― 36
13　ＦＩＳ ―― 39
14　トマトスープ ―― 42
15　ラーメンと防人の部屋 ―― 44

# 1情報収集

ある日の夜廃工場でローブを着た男とスーツを着た男が対立していた。
「S．O．N．Gの情報を探ってこい？」
「金はこれくらいでどうだ？」
そうしてローブの男はアタッシュケースのを開く、するとスーツの男は言った。
「僕はスパイじゃなくて護衛とかそっち系なんだけどな……」
「私達錬金術師はあの束縛の死神に依頼を出したんだ、いやなら他を当たるが……」
「分かった分かった……まぁ金がないのは悲しいもんだな全く」
そしてその男はアタッシュケースを受け取ると何処に消えて行った……。そして次の日の朝スーツを着た男は町で情報収集をしていた。
「はぁ……僕スパイごっこ苦手なんだけどな……ってあれは……」
すると金髪の女性が走っていた。その女性は制服を着ており何処か急いでいる様子だった。
「やばいデス!!遅刻するデス!!」
「あれは……確か情報にあったシンフォギアの装者の……暁切歌」
すると男はニヤリとしてまるで獲物を見つけたかのように切歌に近づいた。
「済まないね。お嬢ちゃんちょっと眠って貰うよ？」
「へ？」
すると男は切歌の口と鼻に睡眠薬入りのハンカチを被せた。
「んー!!んー!!」
「あ、騒いでも誰も僕に気づかないよそれじゃおやすみ……」
「ん……」
「さて……とりあえずあそこでいいかな？」
そして男はそのまま裏路地に消えて行った……。
しばらくして切歌は目を覚ました。周りを見ると普通の部屋で

あってベッドにいたがが、切歌の腕と足には鎖が括りつけられていた。
「あたしはいったい……ここは何処デスか!!」
「あ、起きた?」
　すると目の前にはスーツを着た男が椅子にすわり新聞を読みながらコーヒーを飲んでいた。
「貴方は誰デスか!!私をどうする気デスか!!」
「僕?僕は……まぁ死神とでも呼んでよ。君を捕まえたのは君の仲間の情報が欲しいのさ」
　すると切歌は死神を睨んで強く言った。
「あたしは仲間を売る気はないデス!!」
「……そうかそれじゃ明日尋問するしかないな」
「じ、尋問って何するんデスか……」
「ん……内緒」
　そして男はその部屋から出て行った。この部屋にはトイレ、机、椅子、ベッドしかなかった。切歌は何とかこの場を切り抜けようとして胸にあったペンダントを握り詠唱を唱えた。
「Ｚｅｉｏｓ　ｉｇａｌｉｍａ　ｒａｉｚｅｎ　ｔｒｏｎ」
　すると切歌の腕と足にあった鎖が紫色に光やがて消えた。そして切歌はシンフォギアを纏えなかった。
「ど、どうしてシンフォギアが纏えないデスか!?」
　そして切歌は何度試してもギアを纏う事が出来なかった。そして切歌は色々脱出を試みたが無駄に終わった。そしてしばらくして死神がやって来た。
「なんデスか何しに来たデスか……」
「君の様子見だよ尋問は明日だしね……」
「どうしてこんな事するんデスか!!」
「生きる為かな?」
「え?」
「それじゃ素直に教えてくれるのを楽しみにしてるよお嬢ちゃん」
　そして死神はまた何処に行ってしまった。

「調……みんな助けて……」
そんな中死神は隣の部屋でゆっくりしていた。
「はぁ……やっぱり引き受けるんじゃなかった……」
「……まぁ大丈夫だろあしたの尋問…事案だよなぁ…はぁ……」
そうして一刻、また一刻と時間が過ぎていった。

## 2バタートースト

そして次の日未だに切歌は鎖に繋がれたままだった。そして切歌は目を覚ました。
「……朝デスか……」
「おはよう暁切歌さん」
「デス!?」
すると目の前には椅子に座ってくつろいでいる死神がいた。そして死神は言った。
「さぁ尋問の時間ですよ」
「あたしは絶対に喋らないデス!!」
「まぁ貴方は私の聖遺物でシンフォギアを纏えませんがね」
「……ペンダントはとったりしないんデスね」
「ぶっちゃけ使いませんしそれじゃ始めましょうか」
切歌はその言葉を聞くと死神に恐怖心を感じた。そして死神が袋から取り出したのはトースターとパンとバターだった。
「……何してるデスか?」
「ん?尋問だよ尋問」
そして死神はパンにバターを乗せてトースターで焼き始めた。
「さて4分ぐらいかな?」
(な、何がしたいデスか……)
しばらくすると部屋にバターの香ばしい匂いが匂ってきた。するとグゥ~と小さな音が鳴った。
「おや?お腹空いたのかい?」
「す、空いてないデス……」(昨日何も食べてないからお腹が鳴っちゃったデス……恥ずかしいデス……)
するとトースターはチーンと音を出してパンはいい具合に焼け目が付いていた。そして上のバターはいい感じに溶けており美味しそうな匂いをかもし出していた。すると死神はバタートーストを近づけて言った。
「情報を先に教えてくれたらこのバタートーストをあげるよ?」

「だ、誰がそんな手に乗るかデス……」（うぅ……いい匂いがしてるデス）
　すると死神はバタートーストを持ちながら言った。
「あーあ今のバタートーストは美味しいだろうなぁ。見てご覧このバタートロットロで美味しいよ？しかも見てこれ。あぁ……バタートーストをの中はとってもふわふわこれは美味しいだろうなぁ」
「……」（やめるデス!!そんな美味しそうな説明しなくていいデス!!）
　そんなバタートーストを見る度に切歌のお腹が鳴った。それを死神はニヤニヤとしながら見ていた。
「ほら……少しだけでも情報を教えてくれるだけでいいんだ……ね？」
「い、いらないデス!!」
「……まだ抵抗するか」
　すると死神はそのバタートーストを食べ始めた。
「ん～美味しい!!中はふんわり外はサクッとして美味しい～」
「あぁ……」（そんなのダメデス!!……でも美味しそう）
「さてこれと一緒に牛乳を飲んで……ん…ん……ん～美味い!!」
「……」（こんなの飯テロデス!!ずるいデス!!）
　そして死神は切歌を見ると切歌は抵抗しながらも物欲しそうにしていた。
「さて情報を教えてくれると残りをあげるよ？」
「ッ!!い、いらないデス!!」
「……そうか」
　すると死神は部屋のゴミ箱に行った。
「な、何してるんデスか？」
「え、そりゃ君が情報を吐いてくれないから捨てるんだよ」
（そんな事ダメデス!!もったいないデス!!）
　そして死神はバタートーストを捨てようとした時、切歌が叫んだ。
「分かったデス!!少しだけ情報話すデスから!!」
「……そうかそれじゃ先に情報を教えてね？」
「……分かったデス」

そして死神は情報を聞くと切歌にバタートーストと牛乳を渡した。
「お、美味し～デス、中はふわふわで外はサクッとしてバターが美味しいデス!!」
「情報はこれだけか……まだ時間はあるからゆっくりやって行こう……」
だが切歌は知らない……これからまた尋問がある事に……。

# 3チャーハン

「……暇デス」
　切歌はあの尋問の後何もされないまま時間が過ぎていった。すると部屋に死神がやって来た。
「おや暇そうだね」
「誰のせいデスか……」
「いやぁ……だって情報吐いてくれないしＨＡＨＡＨＡ」
　死神はとてもお気楽に言っていた。すると死神の方から話しかけてきた。
「全く君は学校があっていいなぁ……最近僕は仕事ばっかりで辛いよ……」
「ならあたしの手足に付いてる鎖を取って欲しいデス」
「それはダメだね……とりあえず次の尋問までこれで暇を潰しててよ」
　そうして死神が取り出したのは知恵の輪だった……。
「まず君にはこれを解いてもらうよ、まぁ暇つぶしにはなるでしょ？」
「……分かったデス」
「じゃ僕は尋問の準備をしてくるよ」
「また飯テロデスか!?卑怯デス!!」
　すると死神は袋から中華鍋を取り出し、料理を始めた。切歌は特にやることはなく、知恵の輪に没頭していた。
「難しいデス……」
　そしてしばらくするといい匂いが漂って来た。切歌は必死に知恵の輪をしていたが知恵の輪をベッドに置いた。
「……無理デス!!こんな美味しそうな匂いがしたら集中出来ないデス!!」
　すると死神は出来たてのチャーハンを持って来て切歌のちょっと前ぐらいで止まった。
「さて夜ご飯はチャーハンだよ～さぁ大人しく吐いて貰おうか」
「その手には乗らないデス!!」（次は絶対に喋らないデス!!）

「仕方ないそれじゃ僕が食べちゃおうか」
　そして死神はチャーハンをスプーンですくい口の中に入れた。
「ん～やっぱり出来たては美味いな～」
「絶対に吐かないデスよ!!」（あ～美味しそうデス……）
「今日のチャーハンはご飯がパラパラでしかもレタスがシャキシャキしてて美味しい!!」
「あたしは情報を……」（本当デス凄いパラパラデス!!）
「卵もいい感じに柔らかいしベーコンも塩コショウが効いて美味い!!」
「絶対に吐かな……」（そんなに美味しそうに食べるのずるいデス!!）
「これは熱々のうちに食べたいよなぁ？」
「……たいデス」
「ん？なんて？」
「情報を話すから食べさせて欲しいデス!!」
「じゃ先に教えてね？」
「うぅ……調、みんなごめんデス……」
　その切歌から情報を聞き出すと死神はチャーハンを切歌に渡した。すると切歌はチャーハンを美味しそうに頬張った。
「何これ美味しいデス!!チャーハンがパラパラしてるデス!!」
「そうか？美味しいか？なら良かったよ、おかわり要る？」
「欲しいデス!!」
　そして切歌は満足してベッドに横になっていた。その間死神は情報をまとめていた。
「ん～やっぱり聞けるのは装者達の戦い方やその特性か……」
「……向こうは幸せそうだ全く」
　そして死神はパソコンを閉じると切歌のいる部屋から出て行った。
「そろそろちょっかいでも出すか」
　そして死神は明日に向けて備えるのだった。

# 4兎とみたらし団子

朝切歌が起きると目の前に死神が顔を覗いていた。
「おや、起きましたか？」
「……心臓に悪いからやめて欲しいデス」
「それはすいません……それじゃ私は外に出て来るのでこれでもやっていてください」
すると死神が取り出したのはゲーム機だった。
「あとど○ぶつの森も入れときますね」
「新しいゲームデス!!」
「それじゃ浮上しますよ」
「浮上……デスか？」
すると部屋が急に揺れ始めた。それで切歌は慌てる。
「な、何が起きたデスか!?」
「この中潜水艦ですよ？」
「潜水艦デスか!?」
「じゃ!!行って来ますので失礼」
「え!?あ、待ってデス!!」
そして死神は潜水艦から離れて買い物をしてブラブラと歩き回っていた。
「買い物は……まぁこれくらいでいいか……ってあらあら」
すると死神の周りには黒服の男達が囲んでいた。そして目の前に爽やかな顔をした男がやって来た。
「すみませんがあなたを逮捕します」
「やっぱり全部痕跡を隠せなかったか……だからスパイごっこは苦手なんだ……よ!!」
すると死神の周りに鎖が現れ黒服の男達を拘束した。
「……木…忍者初めてみたよ」
「変わり身の術ですよ」
「じゃあこの人達どうしよっか？」
「出来れば解放していただけないでしょうか……もちろん切歌さん

も」
「全部ばれてるね～って歌が聞こえ……って危な!?」
　死神がいる所に丸鋸が飛んで来て、死神は直ぐに回避した。すると現れたのは月読調と風鳴翼だった。
「きりちゃんは何処!!答えろ!!」
「超ブチ切れてる……怖ぇ……人質も解放されちゃったよ……」
「翼さんすいません」
「緒川さんは退いてください」
　そして緒川が撤退すると翼が警告を促した。
「暁を解放して一緒にご同行願いましょうか……」
「流石に荒業し過ぎたな……奥の手使うか……」
「何をする気だ……」
「きりちゃんを返せ!!」
「月読早まるな!!」
　調は非常Σ式・禁月輪で死神に近づいて攻撃しようとした、すると大量の鎖が地面から出て来て調を拘束した。
「クッ!!こんなもの!!……どうして!?シュルシャガナが使えない!?」
「あーもう疲れた疲労がめっちゃくるから嫌なんだよ……」
「月読今助け」
「動くなよ?この子は今人質だ大人しく去る事をおすすめするよ」
「翼さん!!私はいいから!!」
「……済まない月読!!」
　すると翼は調を置いて撤退して行った。そして死神はハンカチを取り出し液体を染み込ませた。そしてそれを調の鼻と口に被せた。
「はーい少し眠っててね～」
「んー!!んー!!んー……」
「よしよし眠ったか……それじゃ帰るか」
　そして死神は調を連れたまま潜水艦に帰って行った。そして潜水艦に着くと隣の部屋のベッドに調を置き鎖で拘束した。
「さて月読調……かまぁ新しい情報が手に入ったって考えよ……」
　そして死神は切歌のいる部屋に移動した。

「ただいま……元気にしてたかい？」
「このゲーム面白いデス!!」
「なら良かったそれじゃ尋問と行こうか」
「……またやるデスか？」
「あぁもちろん全部吐くまで……ね」
　そして死神が袋から取り出したのはみたらし団子だった。
「今回はみたらし団子だ」
「美味しそうデスね」
「意外と反応薄いね……」
「そんな事ないデスよ？３時のおやつにピッタリデス」
「……まぁ一応やるかちなみにこれ何処で買ったか分かる？」
「スーパーとかで買ったやつデスか？」
　すると死神はみたらし団子が入っていた袋を見せた。
「これはな？地元では１日５００本しか作らない有名なお店のみたらし団子なんだ」
「なんデスとぉ!?」
「これは美味いぞぉ……ほら見てこの柔らかい団子そしてみたらし……いい感じに焼けてるだろ～」
「……ゴクリ、デス……」
「食べたい人～」
「はいデス!!」
「じゃ情報教えてね」
「い、いやでも……」
「なら俺が全部た」
「分かったからちょうだいデス!!」
　そして死神は切歌から情報を教えて貰った後切歌にみたらし団子を渡した。
「美味しいデ～スもちもちしてて甘いデスなんだかとても懐かしい味がするデスよ～」
「そりゃおばあちゃんが作ってるからね……まだ情報ある？」
「まだあるデスよ～」

そういいながら切歌は情報を話ていた。しばらくして切歌は再びゲームを初めて死神は考えていた。

「明日は昨日捕まえたあの子にするかな……」

そうして死神はパソコンを閉じた。

# 5ギョーザ

（……私は……一体）

調は眠りから覚めた。そして動こうとすると手足に鎖が繋がれていた。

「ここは……私はあの時あの男に捕まって……」

「読んだかい？月読調さん」

「!?」

調は直ぐに死神から少し離れた。そして調は死神に叫んだ。

「きりちゃんは無事なの!!答えろ!!」

「もう怖いんですけど……まぁ元気だよ……尋問してるけど……」

「きりちゃんに手を出さないで!!」

「君が知っている情報を全て話てくれたら暁切歌に手を出さないと誓おう」

「……分かりました全て話します」

そして調は情報を話た後、死神はとても満足していた。

「これが私が話せる全て……だからきりちゃんは……」

「分かった分かった手を出さないから……うんやっぱり情報が正確だと依頼が達成出来るもんだ、じゃあ僕は失礼するよ……」

「お願い……きりちゃんに会わせて……」

「……」

そして死神は部屋から出て隣の切歌の部屋にやって来た。

「あ、死神さんデス」

「もう友達感覚だなぁ……まぁいいけど……」

「今日の尋問は何デスか？」

「ん？無いよ」

「デス!?」

「ど、どうしてデスか!?」

「今から作って貰うからだよ」

「作るんデスか？」

「そうそう」

そして死神が取り出したのは材料とフライパンと蓋だった。
「じゃあ暁さん暇でしょ？」
「確かに暇デスけど……」
「じゃ、作ろうかギョーザ」
そう言って死神と切歌はギョーザを作り初めた。
「まず僕が長ネギとキャベツをみじん切りにしておくからそれが終わったらひき肉をボールに入れて混ぜ合わせてね」
「分かったデス!!んしょ……んしょ……なんか柔らかいデス」
「じゃあ出来たら餃子の皮で包むんだよ……ってあ、縁に水で溶かした薄力粉をつけてね」
「了解デス!!」
そして死神は切歌と一緒にギョーザを包んで行った。２人でやった物はかなりの量になった。
「いやー出来た出来た」
「あたしのギョーザは形が悪いデス……」
「そうゆうこともあるさ……じゃあ焼いて行こうか暁さん焼いてみる？」
「やるデス!!」
そして切歌はフライパンでギョーザを焼き始めたのだが完成したギョーザは少し焦げていた。
「……失敗したデス」
「まだあるからもう一回やろうか僕もしっかり見てるから」
「分かったデス」
そして切歌はもう一度挑戦して今度はいい具合に焼けたギョーザが完成した。
「出来たデス!!美味しそうデス!!」
「確かにこのパリパリ感は美味そうだ」
そして死神は皿にギョーザを乗せた後切歌に近づいて首に鎖を巻き付けた。
「な、何するデスか!?」
「手足の鎖をはずそうと思ってまぁギアは纏えないしあんまり状況は

変わらないさ」
「まぁ動きにくかったからちょうどいいデス」
　そして死神はギョーザが乗った皿を持ったまま部屋を出ようとした。
「暁さんついて来て」
「何処に行くんデスか？」
「お隣さんも一緒に尋問するんだよ」
　そして死神は切歌と一緒に隣の部屋にやって来た。ドアを開けると調が睨んでいた。
「……何しに来たの」
「尋問だよ尋問」
「何してるデスか……って調!?」
「きりちゃん!!」
　すると切歌は調に抱きついた。
「きりちゃん良かった……無事で本当に」
「調～会えて良かったデス……」
「あーそこまででやめようか」
　すると調は切歌を庇いながら睨んで叫んだ。
「私達をどうする気……」
「いや月読さんを尋問するだけだよこれで、まだ話してない事あるでしょ？」
「……ギョーザなんかで聞き出せると思ってるの？私は食べない」
「え!?食べないデスか!!」
　すると切歌は少し残念そうにしていた。
「あーあせっかく暁さんが作ったギョーザを食べないなんて……」
「え？きりちゃんが作ったの？」
「そうだよ？じゃあ僕が1口いただきますか」
「あ、ずるいデスよ!!死神さん!!」
「ん!!これは肉汁が広がり長ネギとキャベツがいい食感を与えている……何よりこの皮の柔らかいくて焼いた所はパリッとしていて美味い!!さぁどうする？」

「わ、私は……」
「じゃあ僕が全部食べちゃうよ～」
「酷いデス!!私達の分残して欲しいデス!!」
「月読さんが言わないと僕が全部食べるからそれじゃ２口目い」
「分かりました!!いいますから全部食べないでください……」
「じゃあ教えて貰おうか」
　そして調は情報を吐いた後死神は残りのギョーザを切歌達に渡した。
「美味しいデス!!皮がパリパリしてるデス!!」
「はいポン酢」
「ありがとデス!!」
「……美味しいよきりちゃん」
「本当デスか!!嬉しいデス!!」
「じゃ僕は情報をまとめるから一緒に食べててね」
「分かったデス!!」
　そして死神は部屋から出て切歌を拘束した部屋に行き失敗したギョーザを食べていた。
「……まぁ初めてにしてはよく出来てるよ……美味い」
　そうして死神はまたギョーザを口の中に入れるのだった……。

# 6 ハンバーグ

「んー……」
　死神はパソコンを打ちながら考えていた。
「アマルガムモード……エクスドライブモード……完全にパワーバランスに差が出てるよ……まぁ情報をこれだけ得る事が出来たんだよしとしよう」
「……私がいる部屋でやる必要ある？」
「いや～だってここ静かだもん」
　死神は笑いながら調に言った。すると調は不満そうにしながら答えた。
「別にここでやる必要はないはず……出ていって」
「それは困るなぁ～一応暁さんのいる部屋でやってたんだけどね？」
　すると部屋のドアが開き、切歌がやって来た。
「見て欲しいデス!!ジンベイザメが釣れたデス!!」
「……こうゆう事だよ」
「……きりちゃん」
　そして切歌また部屋に戻り死神はしばらくしてパソコンを閉じた。
「ふぅ……そろそろ尋問でも始めますか」
「……もう話せる事はありません」
「そうなんだよね～じゃあ一緒に作る？そしたら手足の鎖を外して首だけに巻いてあげる」
「……わかりました」
　そして死神は調の首に鎖を巻き付け手足の鎖を外した。
「これで動ける……」
「まぁ基本は暁さんと自由に過ごしたらいいよ、じゃあ始めようか」
　そして死神と調は調理を開始した。
「じゃあ月読さん玉ねぎのみじん切りをお願いね」
「もう出来てます」
「おー早い料理出来るの？」
「大体きりちゃんの変わりに私が作るから」

「そうなんだねじゃあ後の手順とか分かる？」
「みじん切りした玉ねぎをバターを入れてラップして3分するんですよね？」
「正解だよ僕は牛豚合びき肉と卵をボウルに入れとくから」
　そして3分が経ちみじん切りをした玉ねぎを入れて混ぜ合わせた。
「それじゃ形を作ろうか」
「大きさはこれくらいにしましょう」
「そうだなせっかくだし今日は大根おろしで和風にしようかな」
　そして死神は大根おろしをやっている間に調がハンバーグを焼いていた。
「サラダ油はもうひいたから後は中火で両面を焼くだけ……」
　そして調はハンバーグを両面焼いたら、お酒を回し入れ、蒸し始めた。
「これで5分待てば出来ます」
「そうだね」
「いい匂いがするデス!!」
　すると切歌が部屋にやって来た。
「きりちゃんもう少しで完成だから準備して」
「了解デス!!」
「仲がいい事で……」
　そして5分が経ちハンバーグが完成した。そしてそれをお皿に盛り付けうえから大葉、大根おろしを乗せて完成した。
「よし完成だ上からポン酢かけて」
「了解……」
「それじゃ食べますか」
「「いただきます（デス）」」
　そして3人はハンバーグを1口頬張った。すると3人の表情が幸せな笑顔に変わった。
「これは……ハンバーグの肉汁が噛むごとに喉を通っていく……しかも柔らかくジューシーな歯ごたえをしてる……」
「大根おろしと一緒に食べたらあっさりしていて食べやすい……」

「これはご飯が欲しくなるデス!!」
死神と切歌、調はハンバーグを食べ終えるとそれぞれで片付けをしていた。
「はいきりちゃんこれ洗ったからお願い」
「ピカピカに拭くデス」
「全く……ん？錬金術師からか」
すると2人はその言葉に反応した。
「錬金術師デスか!?」
「まぁ依頼人がそうだからなまぁ情報渡すだけだし」
「それを渡してどうなるの？」
「うーん君達の仲間とかに被害が及ぶんじゃない？」
「何とか止める事は出来ないデスか!!」
「いや情報を渡す前金は貰っちゃったしなぁ……」
すると調がある質問をしてきた。
「ねぇ……私が貴方に依頼を出すのは？」
「……錬金術師の依頼が終わったらいいよ？」
「ならその依頼が終わった後錬金術師を捕まえて欲しい」
すると死神は思いっきり笑い出した。
「はぁ……はぁ……僕に錬金術師を捕まえて欲しいだって？」
「うん」
「面白い……その依頼受けようじゃないか」
そして死神は部屋から出ていった。死神は笑みを浮かべながら歩いていた。
「さてどうしようかな……ふふっ」
そして死神は次の戦いに備えるのだった……

# 7　へいき、へっちゃらｉｎご飯メドレー

夕方……廃工場で死神は錬金術師を待っていた。すると錬金術師達は突然現れた。
「おやおや……そんなに大勢で怖い怖い」
「……依頼した物は」
「ここにあるよ」
そして死神はポケットからＵＳＢを取り出した。
「ならいい……所で後ろの黒服の子供はなんだ……」
「あ、あたし達は死神の助手デス!!」
「……同じく秘書です」
「それじゃ渡しましょう……」
すると錬金術師達はアルカノイズを出現させた。
「……どうゆう事だい」
「悪いが君の仕事は終わった……では死ねぇ!!」
すると錬金術師達とアルカノイズが攻撃を仕掛けて来た。
「依頼破棄されちゃったか……じゃあ次の依頼をしますか!!」
すると死神は一気に錬金術師達を全員捕まえた。だがアルカノイズは死神に向けて攻撃を続けていた。
「馬鹿め!!私達を捕まえてもアルカノイズは止まらないぞ!!死ねぇ!!死神!!」
そして死神に向けてノイズ達が攻撃してくる時詠唱が聞こえた。
「Ｖａｒｉｏｕｓ　ｓｈｕｌ　ｓｈａｇａｎａ　ｔｒｏｎ」
「Ｚｅｉｏｓ　ｉｇａｌｉｍａ　ｒａｉｚｅｎ　ｔｒｏｎ」
ギアを纏った調と切歌は一気にノイズ達を殲滅した。
「作戦成功デス!!」
「大勝利」
「いやぁ成功して良かったよ～」
「シンフォギア装者が何故ここにいる!!貴様私達を騙したな!!」
「いや殺そうとしたのお前達だし?それじゃしばらくここで眠っててね～」

そして死神は錬金術師達全員に睡眠スプレーをかけて眠らした。
「それじゃ依頼達成だ」
「まさかここまで上手くいくとは……」
「勝利とは戦う前から決まっているって言ってたからなそれじゃ報酬を頂こうか」
「え……」
「……まさか報酬無しとか言わないよな？」
「そ、それは……」
すると天井が破壊されミサイルが飛んで来た。それを死神は鎖で回避する。
「……僕を嵌めたな月読さん」
「ち、違」
するとガトリングの弾が死神を直撃した。そして後からクリス、響、翼、マリアがやって来た。
「調ちゃん、切歌ちゃん!!」
「大丈夫か!!後輩共!!」
「切歌、調良かった……無事なのね」
「とりあえず2人は救出した……後はあの男を捕まえるだけだ」
「誰を捕まえるだって？」
すると装者達は後ろを振り向くと同時に全員の足に鎖がくくり付けられていた。
「全く……いきなりガトリングとか死ぬよ？僕」
「死神さん私何も……」
「いや……うん大体分かった、多分2人がギアを纏ってそれを勘づかれたって感じだね」
「……頭の回転が早いのね」
「おぉ……アイドル大統領に褒められるとはこう」
「ちょ!?そのいい方やめなさい!!」
するとクリスが銃を死神に向けて言った。
「とりあえずご同行願おうか死神さんよぉ」
「ん？いや君達今ギア使えないからね？」

「は？そんなわけ……!?イチイバルが使えねぇ!!」
　すると響が死神に必死に訴えた。
「どうして貴方はこんな事を話をすればきっと……」
「ん？それは暁さんや月読さんを攫った事かい？それはまぁ依頼だからね……生きる為だよ僕は……そうそう月読さん？」
「……なんですか？」
「そういえば報酬の内容言ってなかったね……僕は立花響を貰うよ」
　すると死神は響を拘束して死神の元に引き寄せた。装者達は驚きを隠せなかった。
「え？……私ですか!?」
「いやだって話をして欲しいんでしょ？お人好しの立花さん」
「立花を連れては行かせん!!」
　そして翼は手に持っていた刀で切りつける、すると死神は手榴弾らしき物を投げつけるとそこから煙が発生した。
「く、目くらましか!!」
　翼はそう思っていたが自分にある変化が起き始めていた。
「なんだ段々眠気が襲ってくる……」
「象も眠る催眠ガスだよ……じゃおやすみ～」
「ま……て……死…神」
　そして死神は装者達が眠ると同時に何処かに消えていった。そしてしばらくして響は目を覚ます。
「……あれ、私は……」
「起きたかい？立花さん？」
　すると死神は机に炊飯器と様々な物を置いて待っていた。
「他のみんなは!!」
「ん？あぁ多分寝てるだけさ……知らんけど」
「そっか……よかった」
「それは尋問でも始めますか……」
「え……えぇ!?私なんにも情報知らないですよ!!」
「え……そうなの？じゃあ君の恥ずかしい事や他の装者達の恥ずかしい事を聞かせてよ」

「え……いやそれは……」
「今ならご飯&ご飯がついてく」
「喋ります」
「……君いくらなんでも早すぎない？」
　そして死神は響を椅子に座らしてご飯をよそった。
「じゃあまず普通のご飯だよ」
「いただきます!!ん～美味し!!」
「……早いね次は黄身を醤油につけた卵かけご飯だよ」
「こ、これは卵の黄身が醤油と絡まって美味しい!!」
「さらにさらに死神特製のふりかけだぁ!!」
「卵と海苔それと……これはゴマですね……これはなかなか」
「まだまだぁ!!そこから明太子も乗せてぇ!!」
「これまたピリ辛が癖になる～」
「トドメのお茶漬けだぁ!!」
「体があったまってさらに食べやすいからまた箸が進むぅ!!」
　そして炊飯器の中にあったご飯が全て無くなり、響はとて満足していた。
「とても美味しかったです!!」
「……君…凄いね」
　そして死神は響を攫った事を少し後悔するのだった……。

## 8お好み焼き

「……暇だなぁ」
　響は部屋のベッドで横になっていた……すると部屋のドアが開き死神がやって来た。
「……やぁ立花さん」
「あ、死神さん……ってボロボロですねどうしたんですか？」
「あぁ……それは今日の朝にね……」
　そして死神は今日の朝の出来事を語るのだった。
「あの子どんだけ食べるんだよ……潜水艦に帰って次の日直ぐ買い物って……はぁ……」
　そして死神は食材を買った袋を持ちながら歩いている時だった。
「あの……死神さんですよね？」
「ん？君は……誰だい？」
　それは白いリボンをした黒髪の女性だった。
「響を返してください」
「誰かは知らないがそれは出来ない相談だ悪いが諦めてくれ」
「そうですか……」
　すると黒髪の女性は急に詠唱を唱え始めた。
「Ｒｅｉ　ｓｈｅｎ　ｓｈｏｕ　ｊｉｎｇ　ｒｅｉ　ｚｉｚｚｌ」
「え？」
　すると黒髪の女性は急にシンフォギア？を纏って攻撃し始めた。
「なんだそれは!!そんな情報知らないぞ!!シンフォギアは６人のはず!!」
「これはファウストローブです!!早く響を返して!!」
　死神は黒髪の女性の光線を何とか避け続ける。
「情報が足りなさ過ぎる!!一旦撤退を」
「逃がさない!!」
　すると黒髪の女性は極太の攻撃を死神にかまして来た。
「クソ!!残しておきたかったのに!!」
　そして死神は錬金術師達から奪ったテレポートジェムで潜水艦に

戻って来た。
「鎖で何とか弾くけどあれは流石に死んでしまうあの子何者なの……」
「えっと……私の親友がごめんなさい……」
そして死神は調理を開始するのだった……。
「まずキャベツを千切りにしてっとその間に薄力粉をボウルに入れてダマにならいようにかき混ぜながら水を5回入れるっと……」
「……」
「やって見たいかい？」
「え、でも私あんまり料理とか出来なくて……」
「まぁやるだけやってみて、ホットプレートがあったまったらにサラダ油をひいて食べれるぐらいに広げていってね？」
「はい!!でも鎖が邪魔で……」
「はい」
すると響の首に鎖が括り付けられて手足の鎖が外された。
「これで出来るね、じゃあやろうか」
そして死神は響と一緒に料理を始めた。
「大分焼けてきたね……じゃあ豚バラ肉と天かす、もやしを乗せてね」
「これくらいですか？」
「……うん君の1人前がよく分かったよ」
そして響は生地を裏返しにしてその上に死神が上からそば麺を入れた。
「後は卵を割り入れて黄身を潰してね」
「こうですね!!」
「……卵割るの下手だね」
「アハハ……」
そして完成した生地にお好み焼きソースを全体に塗り青のり、かつお節をまぶして広島風お好み焼きが完成した。
「うわぁ!!美味しそう!!それじゃいただ」
「待った」
「何するんですか!!死神さん!!」

「その前に君の親友の未来さんの事を教えてくれないかい？」
「それならいくらでも話ますよ!!」
「ならいいよそれじゃ食べようか」
「「いただきます」」
　そして響と死神はお好み焼きを頬張った。すると響はとても幸せそうにしながら味わっていた。
「ん～これはフラワーのおばちゃんとはまた違った美味しさがあって美味しい!!」
「キャベツともやしがいいね……それに豚バラに卵が絡まっているのもまた……」
　そして響と死神はご飯を食べ終わった後未来について語っていた。
「未来はね私にとっての陽だまりなんだよ!!」
「なるほど……重いな」
「重いって何がですか？」
「いや何にもないよ話を続けて」
　そして死神は対未来対策と貯金残高に追われるのだった……。

# 9嫁と死神とおにぎり

死神は潜水艦の中であらゆる情報を練っていた……
「小日向未来……神の器……シェム・ハ……そしてファウストローブ神獣鏡……シンフォギアには最凶……ね……」
そして死神はパソコンを閉じた。
「ん～無理……僕の鎖と相性は多分性質上互角なんだけど性能の違いだよね～……あの作戦で行くか」
そして死神は響のいる部屋にやって来た。
「……あれ？どうしたんですか死神さん」
「立花さん君にこの服着てポーズをとって欲しいんだけど……」
「い、いやですよ!!そんな恥ずかしいの!!」
そう死神が持っていた服はセクシーニットワンピース……つまり童貞を殺すセーターだった。
「その服背中と横が丸見えじゃないですか!!私絶対着ないですよ!!」
「……ねぇ君の今まで食べた食費の金額教えてあげようか？」
「え？……いくらなんですか」
「……高級レストラン1週間朝昼晩行けるくらいかな？」
すると響の顔が真っ青になった。
「さぁどうする？これを着てポーズを撮ったら食費の件を無しにしてあげるよ、どうする？」
「……わかりました……やります」
そして死神は1度部屋から出て響が着替えるのを待っていた。そしてしばらくして再び死神は部屋に入った。
「うんよく似合ってるよ立花さん」
「恥ずかしい……」
そして死神は響をベッドに座らせてポーズを撮らせ始めた。
「じゃあまず髪を結ぶ真似をして……あ、その時ゴムを咥えてね」
「わ、わかりました」
「ＯＫ、次は寝転んで胸を持ち上げて」
「え!?胸をですか!?」

「そうそうこう両腕で持ち上げる感じで」
「うぅ……わかりました」
「……よし!!いいよ次は正座を崩して体をカーブさせる感じで」
「こ、こうですか？」
「…うんいいよ、次は肩をすくめて胸を寄せて見て」
「これでいいですか……うぅ恥ずかしいよ～」
「次で最後だからねじゃあ後ろを向いて少しおしりを突き出して見て」
「これ背中が見えちゃうじゃないですか!!」
「いいから早く」
「こ、これでいいですか!!」
「……よし!!ありがとうこれで楽になるよ……あ、その服あげるよじゃあ僕はちょっと外に出ていくからこれ食べててね」
　そうして死神が取り出したのは大量のおにぎりだった。
「飽きないように色々工夫してるからね、わかめ、梅、ふりかけ、塩などいっぱいあるから食べといてくれ」
「わ、わかりましたから早く着替えさして下さい!!」
「分かった分かったそれじゃちょっと行ってくるよ」
　そして死神は部屋を出て潜水艦を浮上させて外に出た。
「さて……少し外をブラブラしてたら現れるでしょ」
　そして死神は知らなかった……これから起きる出来事に……。
「はぁ……はぁ……それは聞いてない!!」
「逃がさない!!」
　死神はしばらく歩いていると装者達に襲われたのだが死神は劣勢だった。
「アマルガムモードで襲ってくるとかって危な!?」
「逃がさんぞ死神!!行くぞマリア!!」
「分かったわ翼」
　そして翼とマリアは至高善・薔薇X字を死神に喰らわせるが鎖を球体にして何とか最小限に抑えた。
「体が痛すぎる……」

「あたしを忘れてもらっちゃ困るぜ死神さんよぉ!!」
　そしてクリスは∀∀・デ・レ・メタリカを放ち周囲にバリアフィールドを展開して死神を閉じ込めた。
「死神さんもうやめるデス……」
「私達はあなたを……」
「はぁ……はぁ……悪いけど僕にも男としての意地があるからね」
　すると既にバリアフィールド内に未来がファウストローブを着ている状態で流星を放とうとしていた。
「……大人しく降参して響を返してください」
「そんな訳には行かないんだ……よ!!」
　死神は流星が放たれると共に地面に鎖を刺しており引っ張る力で回避し一気に未来に近づいた、そして死神この戦いの中で最も重要な未来に近づくと言う事が出来た、そして死神は先程撮った響の写真を見せる。
「これな～んだ？」
「え!?ひ、響がそんな際どい格好を……」
　未来の戸惑い……この一瞬のスキを死神は逃さなかった。
「束縛」
「しまっ……ぐ……あ……」
　そして死神は未来を捕獲する事が出来た。
「や～～～っと終わったぁぁぁー」
「な!?お前未来を返せぇぇぇぇぇぇ!!」
　クリスはバリアフィールドを解除して攻撃に移った、それに他の装者達も続く……それを死神は逃さなかった。
「悪いが逃げさせて貰うよ」
　死神は閃光手榴弾をばらまいた。そして破裂すると共にテレポートジェムを使用し未来を連れ去った。潜水艦に戻った死神は気絶している未来の手足を鎖で拘束して自室に戻った。
「ハード過ぎる……疲れた……」
　そして死神は死んだようにぐっすり眠った……。

# １０シチュー

「……あれ？私は……」
　未来は目が覚めて起き上がろうとした、すると手足に鎖がされている事に気がついた。
「私あの時不意をつかれて……」
「あぁ目を覚ましたんだね小日向未来さん」
「!?死神さん……」
　すると部屋から死神がやって来ていた。そして未来は少し後ろに下がって震えていた。
「私をどうする気ですか……」
「大体分かってるんじゃないの？暁さんとか月読さんが言ってたでしょ？」
「……私は２人から普通に生活していたって聞きました」
「まぁそうだね……それじゃそい」
「きゃ……」
　そして死神は未来を押し倒して体の自由を奪って死神は言葉を続ける……。
「正直僕にとって君が１番苦労したんだ……分かるかい？」
「……響は何処ですか」
「じゃあ君が僕の言った事をしなかったら僕に協力してもらおうか」
「私は……絶対に屈しません!!」
　未来は涙目になりながら叫んだ。すると部屋のドアが開き響がやって来た、その時響は少し真っ赤になって言った。
「あのぉ～お取り込み中でしたか……」
「……誤解だ立花さん」
「え!?響これは違うの!!」
　死神は何とか誤解を解いて話を戻した。
「……話を戻すけど今から小日向さんにはシチューを食べないでください、もし食べた場合は次装者達と戦う時に装者達を響と一緒に相手してね」

「……私が食べなければいいんですね」
「そうそう、それじゃスタート!!」
　すると響がスプーンでシチューをすくってあーんをした。
「未来あーん」
「だ、ダメだよ響そんな事しないで……」
「ごめんね未来……私にもやらなきゃいけない時があるの」
「ちなみにこのシチュー作ったのは立花さんだよ？」
「ひ、卑怯ですよ!!」
「未来早く食べて」
「ひ、響私は……」
　未来はなかなか渋とくシチューを口に入れなかった。すると死神が響に言った。
「それじゃ立花さんそのシチューを僕にあーんしてくれないかい？」
「え!?でもそれは……」
「……写真」
「……わかりました」
「いやぁ響が一生懸命作ったシチューを僕がいただけるのは嬉しいなぁ……」
　死神はわざとらしく言ってシチューを食べようとした。すると未来が横からパクッと食べた。
「……貴方に響のシチューを渡しません!!」
「ふふっ食べたね？はい立花さん例の写真返すよ」
「あ……」
「ごめんね未来こんな事してそれじゃ一緒にシチュー食べよ!!」
「え？どうゆう事？」
「まぁ僕から説明してあげるよ」
　そして死神が状況と説明を始めた。
「つまり私達から逃げる為に今は私達を陽動に使いたいって事ですか？」
「そうそう、そもそも僕はスパイとかじゃなくて傭兵みたいな仕事が普通なんだよ」

「ならなんで私と響を……」
「立花さんは鎖で捕まえやすかったってゆうのと後は最初戦ってかなりやばいって思ったのと小日向さんは汎用性が高いからねそれでだよ」
「いやぁ死神さんは悪い人じゃなくて良かったですよ～」
「僕からしたら君が僕の金銭の死神だよ……」
「でもなんで本部に同行しなかったんですか？」
　すると死神は苦虫を噛んだような顔をして言った。
「……ちょっと……ね、それじゃシチュー食べようか!!」
　そして3人はシチューを食べ始めた。
「……美味しい響これ本当に自分で作ったの？」
「うん!!死神さんに教えて貰いながら作ったんだ!!」
「人参、じゃがいも……うんしっかり火が通ってるね」
　そして3人はシチューを食べ終えて話をしていた。
「そもそもなんで切歌ちゃんを誘拐したんですか？」
「だって情報が目の前で走ってるんだよ？捕まえるしかないじゃないか」
「死神さんって変な人ですね」
「失礼なアイツよりはマシさ」
「アイツって誰なんですか？」
「……内緒」
　そして死神は知らない……潜水艦に何かが近づいている事に……。

# 11赤いシャツ

死神はアメリカへ逃げる為に逃走ルートをまとめている時だった……。

「ここで2人に陽動をして貰ってその間にまずハワイに向かうルートは……」

すると潜水艦に警報がなり始めた。死神はそれを聞き急いで操縦席に向かう。

「何が起きた!?……これは潜水艦だと!?」

その潜水艦にはマークが付けられていた。それは死神がよく知るマークでもあった。

「ＳＯＮＧ……大丈夫だまだ光学迷彩が機能してる……」

するとＳＯＮＧの潜水艦は死神の潜水艦に向けて魚雷を打ち込んで来た。

「な!?」

すると死神の潜水艦は直撃して死神は浮上せざるを得ない状況になった。

「クソッ!!浮上だ!!」

そして死神の潜水艦は水面に浮上すると同じくＳＯＮＧの潜水艦も浮上した。そして死神は響と未来を起こしに行く。

「起きてるか!!」

「何の音ですか!?」

「今君達の本部に魚雷当てられて絶賛僕がやばい状況だよ」

そして3人は潜水艦の外に出て来るとミサイルが飛んで来たので死神が防御する。

「出てきたな死神さんよぉ!!」

「……まさか探知されたのか、それはないはず」

「いいえ、あの時クリスが未来にＧＰＳを付けたのが貴方の敗因よ」

そして死神は未来を見るすると首の後ろに赤く光っている物があった。

「……あの時か……悪いが装者達と戦うのは嫌だろうけど頼めるかな

……」
「……いいですよ私負けましたし」
「そうですよ死神が悪い人じゃないのは分かりますから」
　そして響と未来はシンフォギアとファウストローブを纏って翼達と戦い始めた。そして死神が潜水艦を修理しようとすると何かがこちらに突進して来た、それを死神は避けた。
「潜水艦の装甲が一瞬で……」
「お前が死神だな？」
　すると現れたのは赤いシャツを着た大柄の男だった。
「貴方は誰ですか……」
「風鳴弦十郎ＳＯＮＧの司令をやっている」
「つまりボスが直々に現れたって感じか……」
「大人しく同行すれば手荒な真似はしない……」
「悪いが断る…よ!!」
　そして死神は弦十郎を拘束した。
（もしあの男が聖遺物を使用しているならこの鎖は最大限に発揮される……しかし……）
「……ふん!!」
　すると弦十郎は鎖を引きちぎった。そして死神が後ずさりをする……。
「嘘だろ……自力で拘束を解くとか……何処にそんな力が……」
「飯食って、映画観て、寝る！男の鍛錬はそいつで十分よ！」
　弦十郎は一気に近づく、それに死神は鎖で防御するがそれはいとも容易くぶち抜かれた。
「破!!」
「ガッ!!」
　死神はその一撃をくらいボロボロの状態だった。
「はぁ……はぁ……12本いったか」
「もうやめるんだ……君の負けだ死神……」
　しかしそれでも死神は立ち上がって再び弦十郎を拘束した。
「グッ……まだ僕には夢があるんだ……だから負ける訳には行かない

んだよ!!」
　そして死神は更に鎖を出して弦十郎を攻撃した、しかし……。
「うぉおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!」
「ハハ……嘘だろ……」
　なんと弦十郎はもう一度自力で拘束を解き拳ラッシュで鎖を全て弾き返した。そして死神はまた距離を縮められて弦十郎にアッパーカットをされて空を舞った、そして死神は海の中に落ちた。
「見事だ死神……」
（あぁ……済まない……僕は……）
　そして海に沈む中意識を失った。

# 12カツ丼

やがて死神はめを覚ます……
「……あぁ負けたのか……俺は……」
死神は起き上がろうとすると体が動けなかった。周りを見ると手足は手錠などで繋がれていて身動きすら取れなかった。そして何やら視線を感じた。
「じーーーー……」
「やぁ月読さんここは何処なんだい？」
「医務室のベッドだよ」
「そうか、じゃあこれ外してくれないかい？」
「ダメ……もうすぐみんなやってくるから」
「ハイハイ分かったよ……」
やがて弦十郎、緒川、そして装者達がやって来た。
「……お前には色々聞きたい事がある」
「負けましたからね……言っていい情報なら正直にいくらでも話しますよ……」
「相澤黒鬼それがお前の名前だな」
「あぁその通りだよ……よくその情報があったね」
「今回はかなり手こずったさ……なにせ……」
その言葉に装者達息を飲む……やがて弦十郎は言った。
「死亡扱い……だったからな」
「死亡扱いだと？どうゆう事だおっさん……」
「それは死神が答える事だ…それ以上の情報は手に入らなかった」
「答えて貰おうか死神……」
「一応せっかくだし黒鬼って呼んでよ…って言っても親友に頼んだだけだけどね、後は黙秘さして貰うよ」
すると何処からかお腹がなる音がした、そしてみんなは響を見る。
「……響いくらなんでも」
「私じゃないよ!!」
「じゃあ一体誰が……」

すると切歌が死神……いや黒鬼に近づいて言った。
「死神さん、黒鬼さんどっちで呼べばいいデスか？」
「……呼びたい方でどうぞ」
「じゃあ黒鬼さんお腹空いてるデスか？」
「……なんでそう思うのかな」
「黒鬼さんから音が聞こえたデス!!」
「……まぁお腹は空いてるよ」
そして切歌はみんなを置いて何処かに走り始めた。
「ちょっと切歌何処に行くの!!」
「……きりちゃん何しに行ったんだろ」
「所で君達はいつまでいるつもりなのかな？」
「あぁ実は君にＳＯＮＧに入って貰いたいんだ」
その言葉に黒鬼は嫌な顔をして言った。
「……悪いが僕には夢があるんだ、アイツの夢を……」
「アイツって誰だ？」
「それは……言わない」
すると切歌何かを持って帰って来た。すると周りにいい匂いが広がった。
「黒鬼さんカツ丼デス!!」
「暁さんそれをどうするの？」
「黒鬼さんを尋問デース!!」
その言葉に響、未来、調は納得してそれ以外の人はよく分かっていなかった。
「……暁さん本気で言ってる？」
「これは尋問なのデス!!」
すると切歌はそのまま自分で食べ始めた。
「美味しいデス!!卵がとろっと絡まって中のカツがご飯とあって美味しいデス!!」
「暁さん僕にそんなこ「グゥ～」……」
「今お腹がなりましたね」
「早く吐かないと無くなるデスよ～」

その後も黒鬼のお腹がなり続け、やがて最後の1口となった。
「最後の1口になったデスよどうするデスか？」
「まさかやられた事をやり返されるとはね……」
「……なんてゆうかお腹空くわね」
「あぁこの後何か食べるか……」
切歌は最後の1口を食べようとした時黒鬼が言った。
「……分かった僕の負け……負けだからもうやめてくれ……」
「言質取ったデス!!はいどうぞ」
そして黒鬼は最後の1口を食べた。黒鬼は少し幸せそうな顔をして言った。
「……やっぱり美味いな」
「さぁ吐いて貰うデス!!」
「何から話して欲しい？ちなみに暁さんの質問しか聞かないからね」
「な!?おいよく考えて質問しろよ!!」
「切歌いい？しっかりとした情報を聞きだすのよ」
「え？そんな急に言われても……」
すると切歌は思い出したかのように言った。
「そういえばさっき言ってた親友って誰デスか？」
「……聞いて後悔しない？」
「大丈夫デス!!」
すると黒鬼は静かに言った。
「そいつの名前は君達ＳＯＮＧで捕まえたから分かるんじゃないか？」
「えぇ……結構いるよね？」
「まぁ確かにいるな」
「それで名前は？」
黒鬼は静かに装者達に答えた。
「名前はジョン・ウェイン・ウェルキンゲトリクス、僕はウェルの助手に当たる人物さ」

# 13ＦＩＳ

「ウェル……」
　その言葉に全員が反応した。そして何よりも死神……つまり黒鬼がウェルの助手だった事に驚きを隠せなかった。
「あの博士の助手……」
「あ、ありえないデス!!」
「あのイカレ博士のねぇ……」
「……君達僕の親友の事酷くいい過ぎじゃない？……まぁ否定はしないよ？」
　するとマリアは黒鬼に近づいて胸ぐらを掴んだ。
「貴方……夢がどうとか言ってたわね」
「……あぁ言ってたよ」
「貴方はウェルに変わって英雄になりたいの……」
　その言葉で静寂が訪れる……すると黒鬼は静かに言った。
「別に英雄になりたいって訳じゃないさ……」
「……そう…ならいいわ」
「ウェルは何て言ってた……聞いたんでしょ？」
「何故私が聞いたと思ったの？」
「そりゃＦＩＳのフロンティア事件準備したの僕だしね……アイツ死んだんでしょ？」
　その言葉にマリアは固まる……そして黒鬼は言葉を続けた。
「アイツは英雄になったのか？」
「……ええ彼は英雄だったわ……」
「……それを聞けただけで十分さ」
「お前達そろそろ戻れいいな？」
　すると弦十郎が手を叩いて装者達を解散させた。
「色々と済まなかったな」
「いいですよ。今僕の夢も叶いましたし」
「そういえば君の夢はなんだったんだ？」
　そして黒鬼は小さく呟いた。

「ウェルの夢を応援したかった……ただそれだけですよ……」
「そうか……」
「僕はこれからどうなるんですか？」
「最悪……有罪だ……」
「僕がＳＯＮＧに入ったらどうなるんですか？」
　すると黒鬼はその言葉にニヤッとした。すると弦十郎も何かに気がついた様で言った。
「なるほど……そう言う事か……」
　そして装者達と黒鬼はしばらく会う事は無かった……。
　死神……相澤黒鬼が捕まって１週間が経った。そして装者達は本部に招集された。
「どうしたんだおっさん急に……」
「そうですよ師匠何かあったんですか？」
「あぁ……君達に任務を出すことにしたんだ」
「新しい任務デスか？」
「気になるわね。内容は？」
「それじゃ入って来てくれ」
　すると黒いスーツを着た男がやって来た。
「な!?嘘だろ!!」
「貴方捕まったはずじゃ……」
「どもども……先輩方」
「保護観察中の相澤黒鬼くんだ今日から新しく入った新人だ」
　なんとそこに現れたのは死神事相澤黒鬼だった。
「貴方捕まったはずじゃ……」
「いやぁちょっと色々あってお世話になりますよハハ」
「なぁおっさん……なんで死神がＳＯＮＧに入る事になったんだよ」
「うちも人材不足でな、だから雇った」
「お金がないので雇わして貰いました」
　それを聞いて喜ぶ者もいれば呆れる者もいた。
「全く……叔父様は……」
「はぁ……また騒がしくなるわね……」

「黒鬼さん私が先輩デスよ!!」
「私達が死神さんの先輩……」
「この流れは久しぶりだな……」
「確かエルフナインちゃんの時以来だったよね？」
「よろしくお願いしますえっと……」
「好きな方で呼んでいいよ」
「じゃあ黒鬼さんよろしくお願いします!!」
「あぁよろしく……」
　こうして黒鬼が新たにＳＯＮＧに入った。これからまた変わった日常が始まる……。

# 14トマトスープ

「……ねぇ」
「……なんですかマリアさん」
「どうして私を鎖で拘束してるのかしら……」
「……それはもちろんただ趣味で尋問したいだけ」
「そんな理由で捕まえてんじゃないわよ!!」
　マリアは本部にやって来るといきなり黒鬼に拘束されたのだ。
「大丈夫ですよちゃんと許可は取りましたから」
「……ちなみに誰かしら」
「暁さんですよ」
「……切歌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」
　一方学校に行っていた切歌は……。
「……今マリアの声が聞こえたデス」
「きりちゃん気のせいじゃない？あ、きりちゃんそこ間違ってるよ」
「デス!?」
　そして話は戻りマリアは鎖にグルグル巻にされながら食堂で待っていた。
「貴方の尋問は大体知ってるわ……私に何を食べさせない気なの」
「いいえ……今回はマリアさんにこれを食べて貰います」
　そして死神が取り出したのはトマトであった。
「……トマトね」
「えぇトマトです……これでトマトスープを作ります」
「……私もうトマト食べれるわよ」
「……トマトスープの中にゴーヤいれよ」
「ちょ!!やめなさい!!待って縛りつけたまま行かないで!!」
　そして黒鬼は調理を開始した。
「まずトマトを4等分にくし切りにしてっと……」
　そして黒鬼は玉ねぎを薄切りにして、オクラを塩をまぶして洗い3mmに切った。そして鍋にトマトと白ワインを入れて弱火でグツグツとするまで煮込み始めた。

「……よし大分ほぐれてきたな……じゃあヘラでトマトを潰してコンソメを加えてさらに15分……」
そして15分が経ちトマトの皮を取り除き塩コショウで味付けをしたら完成した。そしてトマトスープをマリアの所に持って来た。
「……出来たのね」
「じゃあ尋問タイム!!マリアさんに聞きたい事が……」
「何?ウェルの事ならいくらでも話すわよ」
「ウェルは別にいいんだ正確には貴方の恥ずかしい話を聞きたいだけなんだ!!」
「い、嫌よ!!なんでそんな事言わないといけないのよ!!」
「弱みを握る為」
「この悪魔!!」
するると黒鬼がトマトスープの他にもう1つある物を出した。
「……これゴーヤじゃない」
「生ですよ?トマトスープ食べ切るまでに吐かなかったらぶち込みます」
「え、ちょっと!!」
「はいアーン」
そしてマリアはトマトスープを食べると少し驚いた顔をした。
「……美味しい。トマトがしっかり味を出していてとても美味しいわね」
「でしょ?じゃあ恥ずかしい話を……」
「い、嫌よ!!」
「それじゃあ生ゴーヤを……」
「それも嫌ぁあああああああぁぁぁ!!!!」
結局マリアは決して喋る事は無く食堂でグッタリしたマリアとニヤニヤしている黒鬼を見たとゆう……。

# １５ラーメンと防人の部屋

「……話には聞いたがこれほど酷いとは」
「……」
　黒鬼は部屋を見てため息をつく。その後ろで翼は鎖に拘束されたままだった。
「気にする事はない……私が片付ける」
「そう言ってさらに悪化させたのは誰でしたっけ？」
「……返す言葉もない」
　実は黒鬼が片付ける前に翼が片付けようとしたのだが、本来は普通に片付け終わる筈が、さっきの７割増で仕事が増えて今に至る。
「まさか、緒川さんがいないから僕が掃除とはねぇ……」
「凄い。緒川さんに劣らない速さで片付けが終わってゆく……」
　そう言いながら黒鬼はある程度の片付けが終わっていた。
「……相澤さんは家事が得意なのですか？」
「まぁ研究室って汚れるんだよ。だから片付けとか料理とかやるのが僕しかいなかったからね」
「そうでしたか……」
　やがて片付けが終わり翼を解放した。すると黒鬼のお腹が鳴った。
「……お腹……空きましたね」
「なら何処かに食べに行きませんか？」
「……いいね。じゃあ僕の知ってるいいラーメン屋さん教えるよ」
　そして翼はある程度の変装をして黒鬼と一緒に外に出かけた。そして、しばらくバイクを走らせた。しばらくしてあるお店を見つけた。
「ここだよ、最近来て無かったからな」
「ここですか……」
　辿りついたお店はラーメン二郎とゆう名前だった。そして２人はお店に入り黒鬼は小ラーメンの券を買って席に着いた。
「あの、相澤さん。何故小ラーメンにしたのですか？」
「あぁ風鳴さん。これからくるラーメンはボリュームがあるからね」

するとしばらくして小ラーメンがやって来た。そのラーメンを見て翼は驚く。
「こ、これはなんてボリューム……」
「すごいだろ？麺は食べ応えがあって野菜や肉がまた美味いんだよ」
黒鬼は普通にラーメンを食べ始めて、翼は恐る恐るラーメンを食べ始めた。
「やっぱりここのラーメンは美味いんだよなぁ……」
「……これは美味しい。麺は食べ応えがありスープに旨みが凝縮されていて箸が進む!!」
「……これはハマったな」
「何か言ったか？」
「いえ何も……」
しばらくして翼と黒鬼はラーメンを食べ終えて満足していた。そして黒鬼は翼に聞いてみた。
「どうでしたか？ここのラーメンは」
「あぁとても美味しかったよ」
「そうですか。なら良かったですよ」
「……またラーメンを食べる時は誘ってくれ」
「いいですよ」（完全にハマったな）
その後しばらく翼はラーメンにハマり、最近は結構な頻度で本部のトレーニングルームで翼を見かけたとゆう。